

発行日 ***2015年3月1日

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

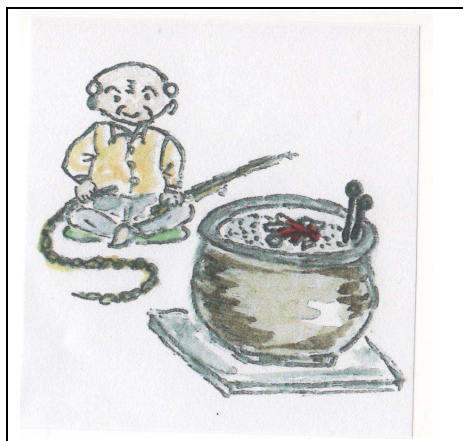
最新号から創刊号まで閲覧できます。http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

一部50円です

炭と灰

今のように暖房器具が無かった子供の頃。山の木からつくった炭は貴重なものであった。家には法事や婚礼などに使った銅製のものや、毎日のようにつかう大きな瀬戸物など幾つもの火鉢があって、灰を入れた火鉢に火がついた炭をいれ部屋を暖めていた。

雪が積もる寒い日でも、離れの小屋で藁仕事をする時などは、ちいさな火鉢ひとつであった。小屋の土間は意外と温かく地べたに敷いたむしろにすわって藁を編んでいるときなどは、ちいさな素焼きの火鉢でも結構暖かい。炭が早く燃えてしまわないように、赤く火がついた炭を灰で少しづつかぶせて調整するのである。しかし、炭が消たり、燃え尽きると部屋は急に火の気がなくなり寒くなる。ちいさな炭であっても火がついていると温かい。



私の祖父は冬場にはいつも小屋にこもっていた。そばに小さな火鉢を置き手水のの水差しに手をつけては、黙々と藁縄を編む。休みもなく朝から晩まで毎日である。小屋が祖父にとっては大事な居場所であったにちがいない。

山で焼いてきた炭は家の軒先にたくさん積まれているのだが、祖父が使っていた炭はわずかばかりの炭のかけらであった。ガンコな祖父は小さな炭を大事に使っていたのである。

昔の人が営んできた生活の知恵もセピア色をした写真のようになって記憶の片隅に残っているだけだが、質素な田舎の暮らしに今も懐かしさと憧れを抱くのはどうしてなのだろうか。街の生活は人工的なものだが、山奥の生活は自然の流れにそって暮らさなければならなかった。相手が天気など自然であったために今のようにストレスを溜めることなく、簡単にあきらめの境地を得られたからではないかと思える。お天道様に文句を言っても仕方がないから「しやないあなあ」と。何かとストレスを感じるご時世だから、炭の勢いを灰で抑えたように心にも灰のようなものを持っていないとやり切れない。

死をめぐるあれやこれ 8

石川 吾郎

「どんぐり」

私は中高生のときから寺田寅彦の科学エッセイのファンだった。今でもそうで、毎年思いっぴいては岩波文庫のエッセイ集を拾い読みする。

◆「伊吹山の句について」では、滋賀県の伊吹山近辺の特異な気象について考察をしている。このあたりは琵琶湖を吹き渡ってくる湿った北風が、日本海側の雪や雨をもたらしてくる。日々、伊吹山の姿を身近に見て育った私は、今でも年に何度かJR在来線で米原あたりを通過するので無関心ではいられない。

◆また寅彦は身近に見られる現象、たとえば金平糖がなぜあんな角を生やしてくるのかや、キリンがどうしてあんな模様をしているのかといったことに対して物理学的な議論を展開している。最近になって動物の皮膚の縞や割れ目模様はどうしてできてるのかといった形態形成についての科学理論が出てきているようなので、時代を先取りしていたといえる。

◆このように寅彦のエッセイの魅力は、身近な自然現象についての理知的な考察の過程にあると思っていた。しかし「どんぐり」という作品は、亡くなった妻の姿と、残された忘れ形見の娘の、どんぐりを無邪気に拾う姿が重なり、哀切きわまる文章。私はこの短い文章を愛している。(この作品は、ネット上「青空文庫」で無料で読むことができます)

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
闘病記 24	梵店主	2
おっちゃんおちよいぼけ 24	A O	3
こころの診察室 16	伊藤 明	4
世界一周旅行記 10	若山哲郎	5
大人の今昔物語 8	石川吾郎	6
素老人・よもだ帳 12	坂本一光	8
哲学屋のつばやき 9	祖蔵哲	10
花盗人のうらおもて 2	大江雉鬼	11
B級サラリーマン渡世譚 12	明石幸次郎	12
女90年の軌跡	眞糰	14
俳句	土田裕	14
懇親会のお知らせ	下村嘉明	14

闘病記 24

迷走の世界

梵店主

人は、いろいろな人と出会い、影響を受ける。よっちゃんも小学校の恩師・まつおかはんとのお会いが無ければ人生が変わっていたかもしれない。

よっちゃんが、入院してから気になっていたのは、高齢で病気がちなまつおかはんが亡くなられる時期であった。先生

から「おれの葬式は頼むで」と幾度も念を押されていたからである。

よっちゃんは、いつ退院できるかわからない状況だから、何とも出来ないのだが、同級生の片山君が度々電話してきてくれた。

「よっちゃんよ、先生もだいぶ弱まってやわ。ながないのう。早よう退院してきてくれいや」

「ああわかった、入院中でも葬式の時には、外出届を出して必ず行くから、たのむわ」

「ほんまやでよ。連絡するさかい、来いよ」

こんなやり取りを幾度も繰り返していた。

ある時、彼は機嫌よく電話してきた。

「先生が見舞いに行くと言うとつてやでよ」

「あほう、来いでもよいと言うといてくれ。見舞いに来て倒れられたら、それこそ大変や」

「わかった、そう言うてくわ」

彼の電話から、先生の身体の調子が弱ってきている事だけは確かであった。

難儀やなあ、と思いつつも長い付き合いの先生だから、今更知らんとは言えない。しかし、治るあてのない病気になる、入院中では如何ともしがたい。

考えた末に、よっちゃんは、とりあえず先生への弔辞を書くことにした。

弔辞

今は無き下和知小学校で、私達の担任をしていたのが松岡先生でした。現在、廃校になって校舎は見る影もありませんが、桜並木だけは毎年春になれば満開の花びらを咲かせています。

先生は、殿田の小学校から下和知小学校へ転任されたばかりで、教育にことのほか熱心でした。真剣に私達と向かい合いながら、やさしく指導して頂きました。時には、安保闘争のデモの体験などを語って、私たちに都会の空気を送り込んでくれました。今から思えば、その頃が先生として一番油が乗り切った時期だったのかも知れません。

先生から何を教えてもらったかと聞かれば、一生懸命さと公平性だと思います。いつも先生は「無理をしたらあかんぞ！」と勝ち気にはやる私たちをなだめ優しく見守ってくれていました。また、先生はどの子に対しても分け隔てなく公平に付き合ってくれました。

先生は、酒をこよなく愛しておられました。先生が酒を飲みながら時間を気にせずとことん話を聞いてくれた事で心が救われた想いをした人は多いと思います。

私も、これまで多くの先生に出会ってきましたが、松岡先生のような先生はいませんでした。先生は、反骨精神を持って自分の想いを語り社会の矛盾を嘆いておられました。

自分の生き様を隠さず我々に見せながら人生を教えてくださいましたのだと思いま

す。人生に成功や失敗はありません。いや、ほとんどが失敗の連続だと言ってもいいかも知れません。

生きる事の喜怒哀楽を様々な姿で見せながら、私たちに生きる勇氣と優しさを生涯に渡って教えてくれていたと思えます。あらためて、私たちの心を半世紀の間、引付けてきた松岡先生の人間的な魅力とは何かと問いかけたと思います。

松岡先生、これまで色々とお教えいただきありがとうございます。

よっちゃんは、書き終えてひと安心した。もし自分が葬儀に出られなくても、同級生の片山君に読んでもらえば、先生も許してくれるだろう。

それにしても、まつおかはんは、いつ亡くなるのだろうか。気になって仕方がないよっちゃんであった。



被害妄想、K子の謎…の巻

ある日突然、被害妄想に取りつかれた（どしか私には思えない）K子の話の続きである。

留守の間に、誰かに侵入されて「家中から高価な帯留めや着物、茶道具がなくなっていく」と言っかと思つたら、「三口のガスレンジのうち、自分はふだん一つしか使っていないのに、ほかの二つがドロドロに汚されている。誰かに使われている、気持ち悪い」と真剣に訴える。

私は呆れつつ、「台所って、あちこち油が飛んでドロドロになるよね。私も、使つてない魚焼きがドロドロでびっくりしたことあつたよ」とか「去年の夏に、思い切つて断捨離したと言つてたよね。そのときに処分したと違う?」と応じるのだが、K子はヒステリックに「私はきれいな好きやねん、ドロドロなんかしたことないっ。断捨離したんは古いお鍋とか、そんなもんだだけで、帯留めなんか捨てるわけない」と反論する。

ならば、言わせていただくが、アンタ、いつそんなに高価な帯留めや着物を買つてたんだよ?。いつも給料が安いと嘆き、そのくせ、お出かけ大好きで、暇さえあれば歌舞伎やコンサートに行き、ヒラヒラとレースの付いたような小物類をやたら

らに買いまくつたりしているせいで、いつもピーピー。保険を担保に三万とか五万のお金を借り出しては、穴埋めしていたのに…。ブランドもののバッグがなくなり、高級ブティックの洋服がなくなり、田崎真珠で買ったばかりの真珠のネックレスがなくなった、等々と言われると、「うそばかり…」と腹が立ち、同時に虚しい気分になつてくる。「だつて、本当やもの」と言うK子の顔が寂しくて、こちらもどどん落ち込んでいく。

精神科医のI先生のアドバイスを思い出し、思いを込めて「ねえ、K子、いまどきメンタルクリニックなんて誰でも気軽に受診してるやんか、一緒に行こ。薬で治まるらしいよ。きちんと専門家に話を聞いてもらつたら、それだけで楽になれるかも」と言つても、「やつぱり信じてくれへんねね。だけど、これは本当やからね」と何度も繰り返す堂々めぐり。

K子の妄想は家電製品にも及ぶ。自分が買ったものではないものに変えられている、というのだ。白い炊飯器が薄いクリーム色のものに変えられていて、「気持ちが悪くて、ご飯を炊かれへん」と言う。その前には、水道に毒を入れられていて「気持ちが悪くて、ご飯を炊かれへん」と言っていた。

家電の類の妄想は留まることがないみたいで、トイレの水洗用のタンクを「見たことのないデザインに変えられている。

前のは、丸い風船みたいなものが入っていたけど、その風船がなくなっている」。思わず、「それ、新製品やで。よかったやん!」と言つてしまったが。その後、K子は意外な行動力を発揮して、TOTTOのショールームに相談に行ったが「残念ですが、ここではよくわかりません」と言われたらしい。そりや、そうだろう。

シャープのアクオスが、もつと薄型だったのに、厚くなつていくという驚愕の（本人にとつて）知らせが舞い込んだのは、夜中の電話でだった。「ヨドバシカメラで買ったものやから、調べてもらいたい。ヨドバシカメラの偉いサンを知らないか?」という内容だった。そんな人を私が知るわけないやろ。たまくに安売りの電池等の消耗品を、さらに、たまくに壊れた家電の買い替えにくる客を、ヨドバシカメラの偉いサンが相手にしてくれるわけがないし、そもそもどこかの偉いサンと知り合いになれるような暮らしをしてないっていうのだ。

先日、K子は私が信じてくれないから、と証拠の品をいくつか持って来た。まず、破れた肌着。「洋服とかもズタズタに切られて」と言っていたが、これはどう見ても大きなほころび。身頃をナナメに切られている、とかいうなら怖いがいまでは、本人がやったと私は思うだけだが、襟元の縫い目のところが大きくほけているだけで「切られている」という表現には当たらない。中国の人には失礼だが、

メイド・イン・チャイナの絹製にはよくある「ぼぼけ」だ、これ。

K子はものすごくムカついた表情で「だつたら、コレをどう説明してくれる?」と指差すのは、いま自分が着ている花柄の薄手のセーター。「前はブルーだったのに、ピンク色が入っているのに変えられている。前のブルー、覚えてない?」と真剣に聞く。覚えていないわけない。「もし、それが誰かの手でされているなら高度な犯罪やね。色を変えて、それが新品ならまだしも、古さ加減まで前と同じようにしているわけ?」と言うと、「そうよ、すごい高度よ。一人を抹殺するのに、1億円ぐらいかけるんやて」。『それのお金、誰が出すのん?』『国かな…。警察やから』って、あんた! そんな税金の無駄遣い、許されるか、ふつう?

極め付け、と言いたげに、K子が紙袋から取り出したのは、アロマポット。コードの途中に、入切のコントローラーが付いているが、そこがグレーで妙に大きい。「もとは白だった。いまでも大丸で売っているから、一緒に確認に行つてほしい」と言う。

売り場に行つてみたら、確かに類似品が並んでいて、コントローラーの部分が明らかに違う。K子が勝ち誇つたように「ね、こういう犯罪があつて、NPOもあるねん」…まさか? (A O)

伊藤 明

教育と「ストレスに弱いこころのくせ」

精神科医という私の仕事はある意味で、教育の結果をみている仕事だという気がします。小児期から青春を過ぎてきた人が、自分の受けて来た教育を実人生のなかでどのように応用しているのかということが診察のなかで見とれるからです。診療を続けてきて私が子どもの教育に対して抱く感想は次のようなものです。まずしつけや教育の動機として、以前、この記事の中で「ストレスに弱いこころのくせ」として掲げた五項目のうち最初の三項目、①他人との比較・競争、②全か無か（完璧主義）、③「すぐべき」思考の三項目を利用するのは注意する必要があります、という事です。これらの傾向を助長するしつけは、ある程度有用であることは私も十分に承知していますが、それにもかかわらず警告を発する必要があるのです。というのも、私がふだん接している患者さんたちはこのような教育を受けた結果として「うつ」なり神経症なりの障害に陥っているのではないかと疑えるふしがあるからです。とくに「うつ」の患者さんは、その思考のパターンの堅さ、あるいは視点の固定化の程度が強く、身についた「こころのくせ」を修正していくのがなかなか難しいことが多いのです。このような思考の柔軟性の乏しさは、子どものころに形成されはじめ、後半生を迎えようとするときに重要な影響を及ぼすことになる。私は想像しています。

「ストレスに弱いこころのくせ」の各項目が、あるひとりの人間のなかでできあがってくる過程は、広い意味での教育と学習の過程にほかなりません。子どもたちは小さな目で自分をとりまく環境を見つめ、その時点の自分にとって一番いいと思える行動を、多くは言葉で表現できない意識や、あるいは自覚できない意識下からつき動かされることによって、行うことになるのではないのでしょうか。小さい子どもにとって親からしかられることにはブレーキがかかり、親が笑顔でほめてくれることをやろうと考えるのは自然の道理です。子どもにとってそれは、まさに環境に適応して生き延びていくために必須のこと。しかも子どもには、自分が生まれ育つ環境を選べる余地はななく、大人たちに与えられた状況のなかで、「何とか、たまたかかっていく」わけでは、理想的とはいえず、多くの矛盾を抱えた環境の中で「よりよい」ことを求めていく。子どもにとつての「適応」ということは、自覚的におこなわれず、圧倒的に与えられた環境に無自覚的に合わせて行くという形でおこなわれるといえるだろうと思います。「人間は自分じしんの歴史をつくる。だが、思う儘にはできない、自分でえらんだ環境のもとはなくて、すぐ目の前にある、あたえられ、持ち越されてきた環境のもとでつくるのである」という、マルクスの言葉は確かに当たっているように思えます。与えられた環境に「ふさわしい」行動を身につけて

いくことで、子どもは成長していく。子どもたちは今という時点で与えられた現実「適応」していかうとするものです。

◆「適応」って何

一方で教育を考えると、「ただ今」の現実だけでなく将来の現実について対応できる能力を身につけさせていくことが大きな目的とすべきはずだろろうと思えます。将来に役立つ限りにおいて現実に「適応」していくことを学ぶということでしょう。しかしながら、実際の学校ではどうでしょうか。個々にはすばらしい教育がたくさんあるということは想像できますが、それでは補いきれない大きな悪い傾向が日本の教育のなかにはあるように思えます。細かい規則の網で、生徒を管理して試験の点数によって人の値打ちを評価するような傾向です。

「学校」というのは、考えれば日本社会のなかでかなり特殊な社会であり、一年に一度しか大きく構成が変わらない閉鎖的な社会だといえるでしょう。そのなかで子どもたちは、限られたごく少数の大人、すなわち教師と、同級生などの言動に接して、良くも悪くもその影響を受けることになるわけです。こういった特殊な条件のなかで子どもたちは、自分なりに考え、「最善」を選ぼうとすることになります。子どもたちの選択できる幅は、ごく限られたものしか残されていないことが多いのですが、歪んだ環境のなかでの「最善」が、往々にしてイジメにはしることであったり、登校拒否であったりするのには私たちがよく知るとおりです。

人間の管理とテストの点数による序列化を中心原理とする学校社会のいびつさは、今ではひとり学校社会にとどまらないものがあるように思います。いびつな「学校社会」で、「適応」して育ってきた人間が、特殊な条件のなかで培ってきた判断体系の残骸を実社会のなかでの生活にもち越して、その社会の傾向にも影響を与え、さらには次の世代へも受け渡していくことさえ考えられます。私が日々、患者さんのなかに見ている「比較・競争」をはじめとした「こころのくせ」もこういった例といえるかも知れません。

しかし人間は与えられた環境に対して積極的に働きかけることによって、その環境を変えることもできるし実際そうしてきた存在でもあります。このための強くしなやかで柔軟性のある知恵の力を人に獲得させるのが教育の使命であるはず。それは管理された特殊な状況、たとえば現代日本の社会ないし閉鎖的な学校の小社会といった状況に対して処世術的に「適応」するための硬直した知識や、ノウハウとしての「こころのくせ」を与えることではない、と私は思います。昨今の教育現場をかいま見る、患者としての不登校の生徒、教師、また教育からの大きな影響下にある若い患者さんたちと会話し、また公教育を受ける子どもの親として得た情報から考えると、点数化した基準のもとでいかに高い得点を得るか、他人よりいかに上へ行くかという硬直化した原理を意識下にたたき込むまで押し付ける場面が多くなっており、柔軟で弾

世界一周旅行記 10

哀愁のブエノスアイレスで

タンゴを

若山 哲郎

力に富んだところを堅くちぢこまらせてしまう不幸な結果になつていような気がします。さらに、生徒のみならず教師に対しても、評価を点数化し管理を強化して、膨大な数の書類や報告書の作成で教師を消耗させて、子供に向かい合うことを困難にしている、学校の管理の問題の大きさを感ずります。

現実に「適応」していくためには、許しがたいこと、おかしいと感じることが目をそむけていかなければ自分自身を守ることができない状況をつくり出すような教育は、もはや教育とはいえないでしょう。教師のほうも、強い管理の圧力のもとで、自主性を奪われ、疲れきり、自分自身を守るためには感受性のアンテナを鈍くしていなければ日々を過ごせない状態が進行しているようにも思えます。そんななかで、実に多様で巧妙なイジメも進行していったといえないでしょうか。教育者は自分の受けた教育（現代の日本では、その多くが受験教育だといえる）について、自分のなかで充分に批判・検討する余裕がない場合には、その偏りをふたたび教育の場に持ち込み、再生産してしまふという事態を招きかねないといえるでしょう。

精神科医療という立場は、教育をはじめとする日本の社会を裏側から見ているように思えます。このような立場を「存知の方はあまりおられないと思いますので、ちよつと過激になりましたが、ここに書き付けておきたいと思ひます。

一月七日にリオを出航し、船は南米大陸東側を南下しています。南アメリカ大陸というたくさんの国がありどうなっているのか、これもアフリカ大陸と同様わかりづらいですね。しかし、地図をよく見れば南米は意外と簡単です。最北部を除き北はほとんどブラジル、南はずつと先までアルゼンチン、なぜなら西太平洋側にあるペルーやチリは南北に狭く細長い国だからです。よつてこの二国が面積も半分以上を占めています。

一月十一日は南米二番目の寄港地アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに上陸しました。リオからここに来るのには南米大陸東部大西洋側を南下し最初の大きな入り江を西に遡行するのですが、これが湾ではなく、ラプラタ川（銀の川）なのです。この川は一五一六年にスペインの航海者ソリスが大西洋への水路をもとめて発見し銀に値する川という事で命名したとか。実際その川は濁っており褐色ですが、これが太陽に反射すると銀色に見えます。彼の意図に反するかもしれませんがまさしく銀の川でした。

南米は基本的に移民国家が大多数です。勿論スペインやポルトガルのように植民地支配のための移住もありますが、その他のヨーロッパ諸国の移民者は原住民で

あるインディオの人々と混血により新たな国を作ったのです。でも勿論ヨーロッパとの関係は深く国境争いは絶えません。つい最近といつても一九八二年ですが、アルゼンチンはイギリスとフォークランド諸島をめぐる戦争をおこしました。年配者の記憶には残っているでしょう。しかし未だにこの問題が解決されていません。現在もアルゼンチンは英国に対して抗議をし、イギリスは実行支配を続けています。先ごろ来日した英国のウイリアム王子はたびたびこのアルゼンチン名マルビナス諸島に軍務で派遣されています。この地域は日本と中国の尖閣諸島と同じく国境争いの種であり、特にこの地域から石油の埋蔵が確認されたところから争いが激化しました。しかも、イギリスが現在もこのような飛び地の直接支配地域を保有しているということも問題化されています。日本では平和の使節イメージの王子でしたが、アルゼンチンでは正反對の受け取り方です。

ブエノスアイレスはご案内のようにラプラタ川が大西洋に向かう大きな流れになる始めにあります。南米のバリとよばれておりアルゼンチン人のヨーロッパへの郷愁が漂い、「哀愁の」という形容詞がよく似合う港町です。南米の多くの国はアメリカ合衆国のようにもともと移民による本國の植民地国家でした。その後そのアメリカの独立戦争に触発され、アルゼンチンも本國スペインがナポレオンに占領されたのを機に独立をしました。一八一三年リオ・デ・ラプラタ合衆国です。

それからは国は分解統合を繰り返しました。しかし第二次大戦後経済は停滞、一九四六年ペロンが大統領になり外国資本の国有化などナシヨナリズムが高まりました。特にその妻エビータは下層階級の生まれでありながら大統領夫人となりカリスマ的人気となりましたが三十三才という若さで亡くなりました。映画やミュージカルにもなり大変有名です。ペロン大統領が亡くなった後のアルゼンチンは軍政と民政が繰り返され、そして先ほど述べたように、一九八二年国民の不满を方向転換させることを図り、イギリス領フォークランドに侵略しました。そんなアルゼンチン、市内の観光は革命広場や教会そし本場パリのオペラ座に続き世界で二番目のコロソ劇場さらにエビータのお墓などでした。お墓といつても一家族が住めるくらいの大ささのまさしく家なのです。半端ではありません。どうも南米ではお墓は階級を象徴するものでその豪華さは、私達仏教國のものとは全然異なります。

さて、アルゼンチンといえばタンゴ。日本ではヨーロッパに渡り、変化したコンチネンタルタンゴが知れ渡っています。アルゼンチンタンゴはより情熱的です。アコーディオンでなくバンドネオンを使うためリズムがはっきりしています。タンゴ発祥の地、ボカ地区では昼間からタンゴのデモンストレーションをレストラン前でおこなっていました。夜はタンゴの演奏会に出かけました。ガス灯が薄

暗く照らす路地を入れて聴く本場のタンゴはまた貴重な体験。中に入って案内された席はかぶりつきの最前列。タンゴのリズムにのり舞台で絡み合って踊る様態は情熱的という表現を超えています。

このように華麗、豪華といったイメージのアルゼンチンですが、これも他の南米の国々とおなじで貧富の差がはげしいのです。ま、タンゴは金持ちの音楽。サッカーは低所得階層ときまっています。そうアルゼンチンはサッカーが強いのだそうです。ボカとかいう人気のクラブチームのサッカー場がありました。それと馬鹿騒ぎしたオリンピックの審査発表会場、ベノスアイレス・シエラトンホテルもありました。献金問題で失脚した猪瀬が朝ラプラタ川沿いを走っていたと現地の人と言っていました。白々しい気持ちでした。

アルゼンチンもわずか一日の滞在、船に戻ってタンゴのリズムの余韻のなかでベットにはいると、船は今遡ってきたラプラタ川を今度は下り始めました。明日はウルグアイ。皆様はまた来月お会いしましょう。
アディオス。



『方丈記』より 2

前回に引き続き、鴨長明『方丈記』の五大災厄と呼ばれる部分をご紹介します。今回は「飢饉」と「地震」です。平安京を襲った災厄の記述は、じっくり読み味わう価値があると思います。この二つの災厄ではその災害の規模の大きさと悲惨さは極まり、長明の筆はいよいよ冴えてきます。内容は具体的に生々しく、その災害を経験したものにしかなれないもののように思います。また注目すべきは、現代の科学的な知識からしても十分納得できる客観性をもっていることです。なお教科書に出ない度はその悲惨さから、四／五ですが、ぜひ教科書で取り上げてほしい記述です。

◇「飢饉」

また養和のころ（一一八一年）だったろうか、だいぶ昔になって定かには覚えていない。

二年間ほど、世の中に飢饉が続いて、表現できぬほどひどいことがあった。春夏の日照り・干ばつ、秋冬の大風・洪水など、悪天候が続いて、五穀がことごとく実らなかつた。春に田を耕し、また夏に植え付けの作業をするが、秋に収穫し冬に貯蔵するものがなにもない。

こんな有りさまなので諸国の民は、あるものは国を捨て国境を越え、あるものは自分の家を忘れ山の中に住む。さまざまの祈祷がはじめられ、とびきり懇ろの

修法も行われたがその御利益もない。京の都の日常では田舎の産物を頼みにしているのに、それもすっかり絶えた。京に上る者もなく、食料が欠乏してきたので取り澄まして生活することはできなくなつてしまった。耐え切れなくなつて、さまざまな財産を片っ端から捨てるように売ろうとするが、てんで興味を示す者もない。まれに売れたとしても、金の価値は低く、粟は高値で売買される。物乞いが道ばたに多く、憂い悲しむ声は耳にあふれる。

前の年はこのようにしてようやくのことで暮れた。翌年こそは立ち直るはずと期待したのだが、あまつさえ疫病が発生し蔓延したので、事態はいっそうひどく混乱を極めた。

世間の人びとが日ごとに飢え、困窮し死んでいく有さまは、さながら水がひからびていく池の魚のとえのよう。しまいに笠をかぶり足を包んで、そこそこ良い装束をつけている者が、ひたすらに家ごとに物乞いをして歩く。衰弱しきつてしまった者たちは、歩いていくかと思ふまに路傍に倒れ伏すというありさま。屋敷の土塀のわきや道ばたに飢えて死んだ者は数知れぬばかりだ。遺体を埋葬処理することもできぬまま、鼻をつく臭気はあたりを満ち、腐敗してその姿を変えていく様子は、見るに耐えないことが多い。ましてや、鴨の河原などには、打ち捨てられた遺体で車馬の行き交う道もなほいぼだ。

賤しいきこりや山の民も力つきて、薪すらも乏しくなつてしまつたので、頼る

べき人のいないものは、自分の家を打ち壊して市場に出して売るのが、一人が持ち出して売った対価は、それでも一日の露命を保つのに足りないということだ。

いぶかしいことには、こういった薪のなかには、丹塗りの赤色や、金や銀の箔が所々に付いていた木っ端が交じっていることだ。これを問い糺すと、困窮した者が古寺に忍び込んで仏像を盗みだし、お堂の中のを壊しているのだ。濁り切つたこの世界に生まれあわせ、こんな心うき目を見るはめになつたことだ。またたいそうあわれなことがあつた。愛する相手をもつ男女が、その想う心が深い方が必ず先に死ぬのだ。その理由はいえ、自分のことを後にして、男であれ女であれごくまれに手に入れた食べ物や物を思う相手に譲つてしまふからなのだ。従つて親と子供では決まつて親が先に死ぬ。また母親が死んでしまつていのに、それとも知らないでいとけない子供が母親の乳房に吸いついていっているものもある。

仁和寺に慈尊院の大藏卿暁法印という方が、このように人々が数しれず死んで行くのを悲しんで、僧侶たちを大勢使つて死体を見る度に、その額に成仏できるようにと阿の字を書いて仏縁を結ばせることを行つた。死者の数を数えるために、四月と五月の二月の間その数を数えさせた。すると京のなか一条よりは南、九条よりは北、京極よりは西、朱雀大路よりは東の区画（都の中心部）で、路傍にあった死体の頭は、総計四万二千三百あまりあつたという。ましてやその前後に死

んだ者も多く、鴨川の河原や、白川あたり、西の京、その他の周辺地域を加えて言うとき際限がないはずだ。いわんや全国七街道を合わせたら限りがない。最近では崇徳院のご在位の時代、長承(一一三二〜一一三四)のころにこういった例があったとは聞くが、当時の様子を私は知らない。まことに希有で悲惨なことであった。

《コメント》

天候不良による飢饉が京の都に与えた悲惨な状況を、長明は同時代の目でビビッドに報告しています。より愛する者が先に死んでいくという洞察にはドキリとさせられます。ここで特に注目したいのは、死者の数の統計をとって具体的に記述していること。これは二カ月間という期間と地域を限定し、死者の額に梵字の「阿」の字を書くという二重のカウントを防ぐ手続きをしており、科学性をもつ方法であり信頼性は高いと思われます。ここで限定された地域は、北を一条通り、南を九条通り、そして東は京極通り(現在の寺町通り)、西は朱雀通り(現在の千本通り)で囲まれた長方形の区画で、現代の京都の中心部分(河原町通りは含まれないことに注意)であり、当時の住人が考えていた都の範囲を示しているのではないのでしょうか。そこに四万二千三百もの遺体が転がって腐敗していくという様子は、想像を絶しています。しかも鴨河原などには、それを超えるような数が打ち捨てられていたのです。まさに八百年前の京都には地獄が存在したと

言えるでしょう。十二世紀の後半の日本は、最近の日本のように異常気象に見舞われていたと思われず。

さらに次の地震の記述は、地震の活動期に入った日本列島に住むわれわれにとつて見逃せないものです。当時の随一の大都市をおそった大地震と、被災した人々のありさまは近年の二つの大地震のありさまと重なります。この大地震は「文治地震」と呼ばれています。

◇「地震」

また元暦二年(一一八五年)のころ、大地震が襲った。その有り様は尋常ではなかった。山は崩れて川を埋め、海では津波が発生して陸を襲った。地面は裂け水が湧き上がり、岩は割れて谷に落ち、渚をこぐ舟は波に漂い、道を行く馬は足元が定まらない。

まして都の内外では、至るところあらゆる建物は一つとしてまともなものはない。あるものは崩れさり、あるものは倒壊する際に塵が舞い上がり煙りのようだ。家が揺れ家が壊れる音は雷のようだ。家の中に居たならばたちまち押しつぶされかねない。走って飛び出せばまた地面は割れてしまう。人は羽をもたず空を飛ぶことはできない。また龍でないので雲に上るわけにもいかない。恐ろしいものなかでとりわけ恐るべきものは地震なのだと実感したことだ。

そういった中で、ある侍の六、七才の一人息子が、築地塀の蔽いの下で小さな家を作ったりして他愛もない遊びをしていたのだが、この地震で突然塀が崩れて

埋められ、無残に押し潰され、二つの目は一寸(三センチ)ばかりも飛び出してしまった。その子供の遺体を父母が抱えて、声も惜しまず嘆き悲しんでいるのはまことに哀れであった。子供を亡くす悲しみには、勇猛な武者も恥じを忘れてしまうのだと改めて気づいた。これは気の毒だが当然のことだと思われる。

このような激しい揺れは短時間で止んだのだが、その名残りの余震はその後絶えず続いた。普通にびっくりするほどの強い地震が、一日に二〜三〇度は下らない日はない。十日、二十日と経過していくとだんだん間遠になって、一日に四五度となり、二〜三度、あるいは一日おき、さらに二〜三日に一度など、おおよそ余震は三カ月ばかり続いただろうか。

地水火風の四大の中で水火風はしばしば害をなすのだけれど、大地は大きく変化をしないとされている。しかしむかし齋衡(八五四〜八五七年)のころとかに大地震があり、東大寺の大仏の頭部が落ちるといったひどい被害があったが、それでも今回の地震ほどではなかったという。被災当時、人々は互いにどうしようもないことを嘆きあって、心の憂さを晴らしているように見えたのだが、年月が経過してくるとこのような災厄を日常の話題にのせる人もなくなってしまうのだった。

《コメント》

この大地震の描写は、阪神大震災や東日本大震災を身近かに経験した私たちには、人ごとでなく感じられます。始めの

部分の一般的な描写はやや類型的になっていますが、子供の悲惨なエピソードはそれを目撃した者にしか描くことができない迫力があります。また液状化現象と思われる記述もあり、余震の頻度が始めは多くてだんだん間遠になっていくのも、今日の科学的な知識と符合していて興味深いところです。歴史を顧みると京都にもこのような大地震がしばしば起きていたことがわかります。

なおこの地震は、元暦二年七月九日に、京都盆地北東部ないし琵琶湖西岸を震源にして起こった直下型だとするの説と、南海トラフ巨大地震だったという説があるそうです。津波に襲われたという記述は南海トラフ巨大地震を考えさせますが、どちらかを決定することはまだできていないようです。

《参考文献》

・水野章一「中世の災害」／北原糸子編著『日本災害史』吉川弘文館二〇〇六年 一四八頁
・ウィキペディア「文治地震」の項

※ ※

以上二回にわたり、『方丈記』の五大災厄の記述を紹介しました。鴨長明自身が若いときに実際に経験をしたことを晩年になってまとめたと思われませんが、その描写は生き生きとして目に見えるようであり、かつその内容は現代の科学的な視点からも妥当なもの。また飢饉の死者の統計は、はからずも科学的な基準をかなりよく満たしており、リアルです。こういった記事は、巨大災害の時代を迎えたとされる現代の日本に生きる我々にとつても示唆に富むように思うのです。

坂本一光

季節みな美しい国の教育は美しいか―続編・素老人の学テ体験―

全国一斉学力テスト（学テ）が実施された一九六二年（昭和三十七年）、私は中学校二年生でした。どういう時代だったか、振り返ってみます。

政治状況を見ると、その二年前に日米安全保障条約の改定を巡る国民的大運動、いわゆる六〇年安保闘争がありました。条約は成立しましたが岸信介内閣は任期途中の六〇年七月に退陣を余儀なくされます。池田隼人内閣の誕生です。経済的には、このころすでに、日本は一九五〇年に始まった朝鮮戦争に伴う特需景気を追い風に敗戦からの復興を果たしながら経済の高度成長を窺う状況にありましたが、池田内閣はかの有名な『所得倍増計画』を決定、実行に移します。私は小学校六年生でしたが、父が新聞を見ながら「十年で月給二倍か、そんなことができるんかなあ」と言ったのを覚えています。ところが、できたのです、十年で二倍にするために想定した経済成長率は超過達成されました（計画期間一九六一〜一九七〇年の想定成長率は年率七・二パーセントで、実績はそれを上回る一〇・九パーセント。国民の消費支出は十年で二・三倍、実質国民総生産は六年で国民一人当たりの実質国民所得は七年でそれぞれ倍増、等々ということです）。所得倍増計画の十年間が自分の中学校から大学三年までに重なっていたのかと振り

返ると、いまさらながらに不思議な思いにとらわれます。ともあれ、日本は一億総「中流」化しました。一方で、工業化と人口の都市集中・過密化、「公害」による環境と命の破壊、農村・農業の荒廃・過疎化等々、経済優先・効率優先で金が仇となった社会は今日まで続く様々な問題を引き起こしました。とりわけ、科学・技術の発展により高度に工業化した社会は人間を専門化（別に言えば部品化）し、その存在を部分化しました。個人は極めて限定的な能力を持つていることだけが期待されるのであり、個人のいわば全面的な能力の発展などを社会は期待しないのです。誤解を恐れずに言えば、たとえば工場の機械の前とか科学研究室の中など、特定の局面では極めて有能な人間が、社会の中では、あるいはもつとせまく家族の中では、一人の人間として全く無能であるというようなことが当たり前のように起こり得ます。専門的分野の中でもそれは起こり得ることで、福島第一原発でそうであったように、何事もない日常には原発を定常的に運転できる組織が過酷事故時には原発を安全に確実に制御できるとは限らないのです。他人ごとを非難しているのではありません。

「自然から核の力を解き放ち術なき科学の端に我も居し」（一光）なのです。さて、経済の高度成長の後に来たのは、石油ショック、バブル経済とその崩壊、失われた十年二十年と、リストラ・非正規雇用社会化等々で、日本はグローバルゼーションという化け物に翻弄され続けているように見えます。

中学生のころに戻ります。経済の高度成

長が始まり工業化社会が進展すると、地方（農村社会）から都市へと労働力が集中します。「金の卵」と称（賞）された中学校卒業生が「集団就職列車」で都会に送り出されていました。東北から東京（上野駅）への列車が典型でしょうが、私の生まれた四国からだって列車は走っていたのです。小学校五年生の終わりに、中学校を卒業したばかりの兄が就職列車で故郷を出るのを遠い町の駅まで送ったことがあります。初めて見る真つ黒い蒸気機関車の姿に驚き呆然と見ていた私は、汽笛がボーツと鳴きガタンと列車が動き出したとき、これが一生の別れかとこみ上げるものを感じました。叱られたわけでもなく、殴られたわけでもなく、人が泣くことがあるのを知りました。昭和一九年生まれの兄の学年は、小学校で一クラスでした。昭和二十三年生まれの私たちは一クラス五〇名以上で松・竹・梅の三クラス。なぜでしょう。兄が生まれた頃には、国がいくら「産めよ増やせよ」と言っても若い男たちは町にいなかったのです。私が生まれた戦後には、私の父もそうですが、戦争末期に再び根こそぎ召集されたいい年の男たちが復員してきました。（第一次）ベビーブームが始まったのです。兄たちの頃は高校進学率も田舎では五〇パーセントもあつたかどうか。農業をはじめとする家業を継ぐ長男でなければ、先を争って都会に就職した時代です（当時は就職できたと思いません）。

私が中学生になったときには、山奥の小さい小学校からも生徒たちが来て、一学年一八〇名で四クラスだったように思いま

す。経済の成長に伴って高校進学率も上がりはじめ、田舎の学校でも「受験競争」（まだ「受験戦争」とまでは言わなかった気がします）が実感されるようになりました。三年生になると、朝晩のホームルームと五教科（英国数理社）以外の授業だけ一緒になるいわゆるホームルームクラスとは別に、能力別クラスが編成されました。県立高校進学組二クラス、私立高校進学組一クラス、そして就職組一クラスです。高校進学率はもう七〇パーセントを超えていたでしょう。また、多分三年生の秋ころからだと思いますが、朝一時間、放課後一時間か二時間の受験補習もありました。さらに、三年生では中間および期末試験とは別に、実力テストや模擬テストが実施され、その成績結果が上位二〇〜三〇名の氏名とともに廊下に貼り出されていました。信じられないと思うでしょうし、また詳細の幾つかには私の思い違いもあるかもしれませんが、でもおそらくは「生徒の将来のためである」という教育熱心のあまり、そういうことが義務教育の場で教師たちに支えられて粛々と行われていたのです（くり返しますが、この熱意を唾うつもりはありません）。そんな中学校であることに違和感はなく、子どもはむしろ、大人からも異を唱える声はなかったと思います。「三年生になったら勉強もきびしくなるぞ」という声は聞かされたように思いますし、私自身も遠くから見る三年生の姿にある種の憧れを感じていたようにも思います。

こんな雰囲気の中で二年生の時に学テは行われました。「君らの将来に係わるん

だからがんばればよ、予想問題だ」みたいなことが言われ、本番実施前には模擬テストがありました(試験問題用紙はいつものとおり先生のガリ版刷りでした)。試験の当日になりました。私が自分の席に座るころ、何人かの生徒がいつもの席を変えさせられていました。私の隣にもいつもと違う子が来て座りました。どう見ても、いわゆる「できる子」の横に「できない子」が座る変更でした(個人の感想です)。試験が始まりました。五教科だったかどうか、試験を何教科受けたかは覚えていませんが、どの教科にも少し前に受けた模擬テストによく似た問題がいくつもありました(他意はなく、個人の、しかも五十年以上も前の記憶にすぎません)。もちろん、私には何の疑念も湧くはずはありませんでした。ただ、「先生の予想ってすごいなあ」と思った事だけは鮮明に覚えています。試験中、先生が机間巡視してきました。普段そんなことをしない先生が、解答用紙をしばらく見たあと、ある箇所をピツと指先ではじきました。そんなことが何回もあり、私には「これ間違っていないか」のサインに思えま

した(これも個人の勝手な感想です)。試験は粛々と実施され、教室の外の廊下には数名の見覚えのある町の大人たちが視察する姿がありました(家に帰って、試験中外にいたどこそこの人たちは誰かと尋ねると、父は「それは教育委員をやっている人たちだろう」と言いました。こうして学テは終わりました。意識の底には先にくつかふれた違和感が潜在していたはずですが、それは私の中で顕在化することは

ありませんでした。子どもは無条件に大人を、とりわけ教師を信じていました。田舎の子どもだけかもしれないませんが、それが顕在化したのは、ある日突然、で

した。学テからどれくらいの間が経ったか、記憶にありませんが学テのことが遠い過去に消えていたころです。体育館で全校集会がありました。それが済んで教室に帰ろうとしたとき、年配の一人の先生が突然前に出て壇上に上がり、「二年生だけ残ってください、話したいことがあります」と言いました。クラスや学年の担任ではなく、教科の先生でした。しばらくじつとつむいていた先生の口から出た言葉は衝撃でした。「私はみなさんに謝らなければなりません。この前の学力テストのことです。皆さんも気がついたことだと思いますが、私たちはみなさんに絶対にしてはいけない不正をしました。これは許されることではありません。申し訳ないことをしました。この償いは一生をかけてもします」それだけ話す先生は一礼をして壇上を下がりました。かすれた小さな声でとつと話す先生の言葉に私は「あつ」と思い、学テ当日のことがまざまざとよみがえりました。しかし、それをどう受け止めていいかわかりません。不正とか、非難するとか、そんなことは思いもしませんでした。大変なことが起こった、しかしグリコのランナーの絵のように両手をあげて万歳するだけで、何をどうしていいかわからず、ただ突っ立っていることしかできない、そんな感じでした。みんなも同じだったようで、ぞろぞろと無口のまま教室に帰って行き

ました。その後、生徒たちがこのことをお互い話題にすることはなかったと思えます。触れてはならぬことを聞き知った、ということでしょうか。しばらくして、他の先生の幾人かは、「〇〇先生があんなことを言ってみても、どうにもならんやろう。みんなのためやないか」などと生徒の前で釈明しました。私はもう、そんな言葉を聞く気はありませんでした。そのころ学テ不正問題は地元でも全国でも問題になったようで新聞をにぎわしました。いつか地元紙で「調査の結果、学テ実施に不正はなかった」と記事に読んだと覚えていきます。今でも身近によく聞く話ではありません。

私の中で意識下に押し込められた学テの記憶がよみがえったのは、前に書いたように大学生になってからです。世間で言う『大学紛争』などという政治的言葉では表せない切実さで、大学や社会や自分自身のあり方を学生たちが問うた時代でした。学テとはどういうことかと問うなかで、あの学テを教育が抱える問題として思い出したので。しかし、私は驚きました。全国どこでも学テの実施はあのようにであったろうと思ひ大学の仲間たちに話すと、みな様にびっくりしたのです。「そんなことがあったなんて信じられん」ということでした。「もつとみんなに話せ」とも言われましたが、今思えば私の経験は特殊であつたということにどこかほっとしました。それでも、今では、全国津々浦々で、ある一定の規模と内容で不正は行われたのではないかと私には思えます。私の中学校だけが特殊であつたとは到底思えないのです。

この種のがなぜ今またくり返されるのか。根底にあるのは、人は自分だけの、しかも一回限りの人生を初めて生きるのであり、歴史に学ぶことはよほどの努力や社会的仕組みがなければ極めて困難であるという事実でしょう。もちろんこれは一般的な建前です。教育が政治的に管理される限り、こんなことはこれからもくり返されるでしょう。政治的道義心や市民道徳に欠けた(としか思えない)政治家や有識者たちが道徳の教科化を声高に言う時代です。「思いやり欠けているのは政治です」「この子らに要らぬお世話の道徳科」(一光川柳)なのに。教育がゆがまないはずがありません。

日本国憲法第二十三条に「学問の自由は、これを保障する」とあります。これを個人に当てはめれば、誰がいつどこで何を学ぶかは、個人の自由であるということでしょう。美しい教育がもしあるとすれば、それは『学ぶ気があれば学び取るであろう』(私はレーニンの言葉だと思ひ込んでいますが確認できません)と言い切れる社会が実現したときでしょうか。それがどんな社会であるかは、想像に値すると私は思いません。百年以上も前に、『教育は、時代が其一切の所有を提供して次の時代の為にする犠牲だ』と書いた人がいました(石川啄木『時代閉塞の現状』一九一〇年)。百年の時代閉塞を越えて、今も耳を傾けていい言葉です。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

祖蔵 哲

近代人カントの躓き

先月はイスラム国による日本人質事件に関して現代社会の苦悩の問題を哲学的思想的に考えました。まだその時点では事件は先行きがわからなかったのですが、結果は最悪の事態に終わりました。そして世界の状況はますます混乱を深めていきます。これは現代社会の問題というより、もともと現代社会が引き継いだ近代がもっていた内部矛盾がとうとう出てきたと状態だと、私は考えます。これは近代の本当の終わりの始まりであると。

さて、このような見方から再び十七世紀から十九世紀はじめにかけての中世から近代社会に移行しはじめたときの西欧の哲学思考方法の変遷について考えてみましょう。前回までの復習になりますが、まず、なんといっても近代思考はデカルトからはじまります。「私は考える、ゆえに私は存在する」というこの象徴的な言葉は、すべてを疑い、残った確実なもの、すなわち「私は考える」とことだけは確実に疑いきれない、この疑いきれないことから出発すればすべてのことが明らかになるということを使ったものです。これは公理から解を導く「演繹法」であり大陸「合理論」と呼ばれました。そしてまた、デカルトは「延長」という概念を世界に適用しました。その『空間』は「均一」であり、ひとつのものしか同時に存

在できないとしました。この「均一」ということは、たとえば中世であれば単なるコップが神の前では神聖な別物に変わると信じられていたことを、コップはどの場所においても同じだと言いました。

これによって、悪魔が人に憑いたり、物に入り込んでいたりしているという中世的考えを排除できるようになったのです。自然と心、物と非物質が一体となつていた混沌的世界から物質と精神を分離し、物の世界と私の世界を分離したのです。

そこでは私は「客観」になり空間的に世界を外から見ることができるようになりました。また、同時代のガリレオは『時間』について、物体の落下観察によって、その均質さを証明しました。それまでは空間と同じように時間というものも、状況がことなればその進む速さは異なると思われていたのです。精霊が宿る空間では時はゆっくりと流れていると。そんな

中世的世界観のなかで彼らは新たな哲学的思考を試みたのです。考えてみれば、「デカルト座標」や「デカルトの定理」生み出したデカルトもガリレオも本来は自然科学者。近代はこの本来、神のものであった『空間』と『時間』を科学によって強引に人間のものへとした時から始まるとも言えるのです。

しかし、このデカルトの確実なものから出発すれば真理がつかめるとした「演繹法」に対して、イギリスのジョン・ロックが「経験論を言います。すなわち、デカルトのいうように人間には生まれつきに物事を明瞭に判断できる能力が備わ

っていない、それは経験によって得られるとしたのです。これは、ある意味、現代の自然科学と同じで、何事も「実験」により確かめ、確実なものをつかもうという「帰納法」です。

ここらまでは前回までの復習ですが、そもそもなぜこのような「哲学的思考」が問題になるかですね。こんなのもいいじゃん、と考える人も大勢いるとおもいますが実はこれが人間にとって大変重要なのです。真理をいかに把握できるかということは、いかに自分たちが生き延びられるのかということと同じです。真理を知れば進む道を誤らなくてすみませんが、それが出来なければ苦悩や破滅が待っています。

さて、デカルトにより開始した近代は、人間の理性はどこまでも真理を知ることが出来ると高らかに宣言したのですが、ロックはいやそうではない、それはあくまでも経験の範囲においてであるとややブレイキをかけました。しかしこの経験論でさえ、十八世紀半ば、イギリスの哲学者デービット・ヒュームという人は「ヒュームの法則」で知られる「であることから、であるべきは導けない」ということをいいました。これはどういうことかという、「であること」というのはいままでこうであったという経験のことです。一方「であるべき」とはこうなるという法則です。すなわち、ヒュームは「いままで起きてきたことが、明日も同じように起きるとは限らない」ということを言ったわけです。ヒュームはそれがただ

の「習慣」であるといえます。まさしく、東日本震災で起きた原子力発電事故などはこの法則があたりはまりますね。まあ、すべてのことはそうかもしれませんが。ということ、人間の能力を最高のものとしてきた近代思考もだんだんとあやしくなってきたのですね。その颯爽と登場したのがドイツの哲学者カントです。

カントの有名な言葉に「コペルニクス的転回」というものがあります。これは自分でそう言ったのですが、あの地動説から天動説への転換を説明したコペルニクスに自分の考えを例えたのです。なにをどう転回したのでしょうか。例えば、ここに一つのリンゴがあつたとします。

あなたは、そのリンゴをどのように認識するでしょうか。大抵の人は、リンゴを「赤い」「丸い」などと認識するでしょう。でも、よく考えてみてください。そもそも、「赤い」「丸い」って何でしょう。「丸い」って何でしょう。つまり、「赤い」とか「丸い」といった認識は、私たちの経験的知識（経験から知ったこと）からきたものであり、先天的知識（経験によらない知識）ではありません。それでは、私たちが経験的知識を持たない状態では、私たちはリンゴを、どのように認識することができるのでしょうか。「コペルニクス的転回」は、この「認識の仕方」にポイントがあります。つまり、普通、「リンゴは、赤い、丸い…」というように、私たちの「認識」は、それ自身で存在している対象のありのまま、そのままの姿に従うべきだと考えられています。つまり今

まではリンゴの方から発信している事柄を正確に受け止めるのが本当の認識だと思われてきたのです。しかし、カントは、リンゴの「赤い」「丸い」などといった認識は、私たちの経験的知識によって操作されているものに過ぎない、したがって、対象の本当の姿を知るためには、私たちの認識が対象に従うのではなく、物（対象）の方こそ、私たちの認識に従うべきなのだと言いました。「リンゴが赤くて丸いと私たちが思うのは、リンゴそのものに『赤い』『丸い』という性質が備わっているのではなく、私たちが、『赤い』とか『丸い』とかいう知識を、ただリンゴに当てはめているに過ぎない。リンゴを『赤い』『丸い』と私たちが捉えるのは、私たちの認識の中に『赤い』『丸い』という概念を知れる能力が備わっているからだと考えました。

カントの考え方というのは、我々の脳がリンゴに関する情報（多くが、赤くて丸い、甘みを持つ果物である）をまず『感性』の働きである感覚器で認識し、その感覚的な素材を我々が先天的に（ア・プリオリに）持つ「時間・空間」の『悟性』（物というのはこの時間・空間の中に存在している）に当てはめることによって、初めてリンゴが構成され、「そこに存在する」こととなります。さらに『理性』によってこれはおもしろいそうとか嫌いかかを判断します。つまり、認識は対象の存在を前提としたもの、とした旧来の考え方に対して、むしろ認識こそが対象の存

在の前提である、としたことを「認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う」とカントは表現したのです。これが「コペルニクスの転回」です。

ここで、旧来の考え方のなかでは、認識は対象の存在を前提とされており、対象があるから我々は物の認識ができるので、カントの考えには、逆に私がいなければ物の存在も失われると解釈できる表現がでてきますが、それは違います。カントにおいても対象の存在は前提です（これは「物自体」と呼ばれています）。それは認識（現象知）と呼ばれています）と同じ対象が存在しないにすぎないということですので。まあ、あなたが見ているリンゴは目の前にあるリンゴとは本質的には一致しないといっているのです。つまり人間はどこまで考えても「物自体」ものの本質には到達できないとしたのです。

カントの言ったことをリンゴの例を出したりしてわかりやすく説明したつもりですがかえってわかりにくくなったようです。要するに人間は物自体、物事の本質はどこまでいっても知ることはできない（それは神の領域である）までは言っていないと思えますが）のです。人間ができるのは「感性」をおして物からうけとったものを、ア・プリオリにそなわった「空間」「時間」、それに把握能力である「悟性」により物に当てはめるだけだということです。そのことをする「理

性」が一番重要であるといいました。そしてなぜ人間にはア・プリオリに「空間」「時間」能力がそなわっているかですが、それは人間や物そのものがこの世界に生きている同じものであるからと考えています。カントが果たした役割は、どこまでいっても到達できない物の本質を捉えるよりも、むしろ「空間」「時間」の形式をつかって物事を把握するほうが重要であると示したことです。かれは人間の「理性」の限界を示すと同時に「実践」の可能性の希望を言いました。これによって人間に課せられた大きな使命（真理をつかまなければならぬ）は一旦留保できたわけです。これが近代哲学の完成者、カントの役割でした。かつて「神の領域」であった『空間』と『時間』は再び、人間が探究すべき領域に戻ってきたのです。

近代というのはこの『空間』と『時間』を人間が徹底して掘り起こした時代です。冒頭にも書いたように現代はもろろん近代の延長です、近代が終わったわけではありません。私たちは今日の技術や経済の発展により現代と十七世紀の近代は違うと考え勝ちですが、本質的な変化はありません。カントが問題にしたこの『空間』と『時間』こそが現代世界の問題の本質になっています。前者はグローバルに、後者は資本主義の生命に。

今回はカントの残したこのキーワードが現代社会の終焉の始まりになるという話をしましょう。お楽しみに。

花盗人のうらおもて 2

大江雉寛

歌徳説話という言葉がある。風流な和歌は利徳を招くとの発想がベースの説話である。ピンチに直面した主人公が苦し紛れに和歌を詠むと敵対者がそれに感動して難問が解決といったパターンがよく見られるものだろうか。前回に続いて「花盗人」がお題なのだが、今回はこの歌徳説話なるものを軸にじっくりやってみる。

まずは「花盗人」に関する辞書の記述から。①花、特に桜の花を手折って持つていく人。花どろぼう。②狂言、桜の枝を盗み折ろうとして捕らえられ、桜の幹に縛りつけられた男が歌を詠んでその風雅のゆえに許される（以上、大辞泉より）。複数の辞書を比べても、ほぼ同趣の内容だが、ここでは②の方を問題にする。辞書の説明を見る限り、狂言「花盗人」は歌徳説話の典型っぽいのが、本当にそう言えるのだろうか。

問題の所在は、狂言「花盗人」と照らし合わせたうえで、「花盗人」はやはり歌徳説話でしたといえるのかどうかという点である。だが狂言「花盗人」のストーリーをどうやって確認するかというところに落とし穴がある。そんなの台本を見れば一目瞭然など言うなかれ、読みやすい活字になった台本はいくつもあるとはいえ、話は単純ではない。表題が「花盗人」でも中身が異なるのである。端的に

いえば、流派による違いである。

狂言の家元は、メディアへの露出も多い茂山千五郎家、野村萬斎を擁する野村万作家などが有名だが、流派は前者が大蔵流で後者が和泉流である。そして、これに加えて鷺流がかつて存在していた。いま「花盗人」を確認するにあたっては、家元制度以前の古態を伝える資料に記された粗筋、大衆化を牽引した大蔵流の台本、それと鷺流の台本を参照することができた。以下、ざっと並べてみる。

【古態】シテが登場して花を折る。花守が登場してシテを縛る。シテが歌を詠む「この程は花の本にて名を附ひて烏帽子桜と人や見るらん」。花守は歌に免じてシテを許し、酒盛りを始める。以下謡い。古典書『狂言集』所収「天正狂言本」より

【大蔵流】(長短二通りの短い方)家主(アド)が登場して知人を誘って下屋敷で花見を始める。ふと折られた枝が目に残り、花盗人は再び現れるはずだから今日こそ捕まえてやろうと言って退場する。続いて新発意(シテ)登場。心を寄せる少年の歡心を得るべく昨日は桜の小枝を失敬したが、もっと大きな枝が欲しいと所望され云々。そして満開の桜に近づき枝を折ったのに合わせて、隠れていた家主たちが再登場して新発意を捕縛する。以下、桜の木に縛りつけられた新発意と家主のやり取り。漢詩や古歌を引いて風流心に訴える新発意と、許すまいぞとする家主との間で交わされる詭弁と屁理屈の応酬

は、家主が根負けして即興の一首詠むのなら許してやろうとなる。そこで新発意は「この春は花の本にて縄付きぬ烏帽子桜と人や見るらん」と詠み、さらに昔から花盗人には酒を盛るものというではないかと言つて酒を催促して大騒ぎになる。

〔君波文庫『能狂言』所収「花盗人」より〕

【鷺流】安太郎(シテ)が登場。とある寺の垣根を破つて敷地内の桜に近づく。

安太郎を盗人と見て、新発意と住持(アド)が登場し、安太郎を捕縛。自分は花見をしていただけで盗人ではないと言つた安太郎に対して、住持は無断で庭に侵入した泥棒だろうと詰る。安太郎曰く「泥棒なら面目も立たないが花見のためなら悪くない。花を求めて命を捨てたという漢詩もあるが、日本の安太郎も美しい花のためなら命は惜しくない」と。この開き直り方を面白がつて住持は「この春は花の下にて縄付きぬ」という上の句に付句ができれば許してやろうと言つ。すると安太郎「烏帽子桜と人は言ふなり」と続ける。住持、安太郎の縄を解き、花の下にて酒宴を催す。ところが凶に乗った安太郎が謡いの途中で桜の枝を折つてしまい、住持に追い回される。〔古典書『狂言集』所収「花盗人」より〕

こうして並べてみると、辞書にいう「花盗人」がぴったりと適合するのは粗筋のみ伝わる古態だけで、台本が残る「花盗人」はいずれもアレンジ済みであることがわかる。また「この春は花の下にて縄

付きぬ」の歌ですべての問題が解決したわけでもない。むしろ花盗人(シテ)と家主/住持(アド)との間で交わされたやり取りこそが喜劇の眼目である。だとすれば狂言「花盗人」を取りあげておき、これは「この春は花の下にて縄付きぬ云々」の風流な和歌による歌徳説話ですと説明するには相当な無理があるということになるはずである。

もちろん何事においても、厳密を追求すれば、却つて曖昧な部分が目立つてくる。「花盗人」という言葉にしても、狂言の舞台や台本を正しく理解して使われているのではなく、響きだけで好まれているのだろう。いわばイメージが先行しているのである。それは「花盗人」の台本の中で引用されている漢詩についても同じである。出典の確認できない詩ではあるが、台本でははっきりと白楽天の詩とされているのである(大蔵流)。白詩というだけでカッコよく聞こえるのなら、それっぽいものは軒並み白楽天曰くとしておこうという発想とでも言えはいいのかもしれない。そんな動機があつたとするならば、それもまたイメージ先行のなせる業と言つていい。そんな流れで改めて「花盗人」という言葉に注目するとすれば、この言葉を用いることによつて振りまかれるイメージがどのようなものなのかといったあたりはもう少し掘り下げてみたくなる。次回、この問題に浪漫主義の文脈からアプローチしてみたい。(続)

サラリーマン渡世譚 22

引き継ぎ

明石幸次郎

Tさんは中国に対する個人的な思い入れもあり、自分がやってきた仕事を引き継いでやってくれるのは、Mさんではなく、明石であると感じ、期待を込めたように、最後は明石の方を見つめながら話を終えた。MさんとTさんとの議論は二人の仕事に対する取組み方、価値観の違いで、二人共、会社に貢献する仕事は如何にあるべきかの問題意識は持つていたと感じた。どちらかと言えば、明石はTさんの考え方に共感を持った。今は利益が出なくとも、誰かが、地味な種蒔きの仕事をコツコツとやり続けることで、将来に収穫できる市場に育てる、この準備を怠らない、これも、営業がやらねばならない大事な仕事であると思つた。

そもそも、これから担当するアジア諸国は、日本との経済格差が大きく、ODAが韓国の様に国の補助金がある国以外は、現在の工場の製造原価ベースで、いくら利益を最小限に抑えても、ユーザーが購入できるのは、限られた機種に限られた台数に過ぎず、営業の仕事は、中国だけではなく、将来の時期に備えての種蒔きの仕事が多くなると感じていた。二人の議論はこれ以上続けても、考え方の相違だけで平行線をたどるだけだと、どちらとも分かつていたのか、Tさんとの引き継ぎは、これで終わりとなり二人

で部屋を出て行くとしたので、明石も立ち上がり、二人の後から、部屋を出た。

席に戻るとN君がもうすぐ昼ですの外に食事に行きませんか？と声をかけてくれた。本社の社員食堂の食事はまずくて、本社資材部に居た頃は、母親に弁当を作ってもらい持って来ていた位であったので、ふたつ返事でN君と外食しようと思いきかけると、Mさんが俺も一緒に行くとなつて、三人で外に出て行き、明石が良く行っていたSという洋食屋に入っていた。昼前にも関わらず半分くらい席が埋まっていたが、明石の顔を見るなり店長とその母親は案内もせずに「久しぶりやね。今日はどうしたの、出張？」と笑顔で話しかけてきた。「今度、転勤になり、本社に舞い戻って来たんです」と言う。「又、本社の資材部？資材に居たSさんは元気にされてます？最近では資材部の住ちゃんも全然来てくれないよ。明石さん一緒に連れて来てね。お願いや」と店長の母親から腕をつかまれて、席に三人は案内された。母親は一応メニューを持って来て

「明石さん、アンタ二年も経ってないね。よく本社資材部に帰してもらったね。三人ともランチでエエですか？」とメニューを見るまでもなく、ランチと決めつけられ、明石も元居た資材部に戻って来たこと決めつけられた。Mさんが「ランチ三つで良いけど、明石君は今度、輸出部に転勤で来たんで、資材部ではないので、俺らの仲間となつたんや」と訂正して、ランチの注文もしてくれた。「そう、それ

は、出世したんやね？」と返してきたので「出世と違つて単なる増員ですわ。」と答えたら、「そんな難しいこと分かんへん忙しいから又、夜に来て、話しかせてね、お父さんも呼んどくわ」と言つて厨房の方に入つて行つた。それを聞いてS君が

「明石さん、この店の常連さんですか、さつき、おばさんが、資材部の住ちゃんと言つてましたが、私と同期のSですか？」「そう、S君や。Tさんとの引き継ぎの前に、資材部に挨拶に行つた時、S君と話をしていたら、君と同期やという事で、そうや、一度、三人で飲みに行こうとなつたんや」と言つたら、Mさんが思い出したように「おい、N。明日、部の歓迎会で、お前が幹事やれと昨日、Aさんに言われてたなあ。ここ予約しておけよ」と指示されたので、N君は「分かつてますよ。そのつもりで、此処に来たんですよ！Mさんは直ぐに先回りされるから、やりにくいんですよ。明石さんも気を付けられた方が良いでしょう」とこちらに振つてきたが、どう気を付けたら良いか、Mさんの性格の問題なので、仕事の報告なり、事前の相談なりを早い目にとつて於けば、Mさんのような性格の人は安心し、逆に仕事を任せて貰えると思つたが、どの程度の細かい報告を要求するかまでは、やつて見なければ分からないし、自分と考え方の根本は違つても、その都度、実際の仕事を通じて、Mさんのやり方を知つて合わせていけば、上手くやつて行けそうな気がしていた。

ランチが運ばれて来たので、N君は早

速、明日の宴会の予約を入れた。明石も人事部のMと約束をしていたので、序に今晚六時で予約を入れた。食事をしながら、Mさんが「N、昼からバングラの入札とインドの現状を聞かせてくれ。Aさんが直ぐにでも、お前が現地に飛んで、最新の情報を掴んで、現地政府に働きかけて来いと言われていたが、どうなんや」と

「行けば、何とかなると言つた状況でもないですが、行かないと分からない事が多いことも事実です。今すぐに行つた方が良いか、もう少し様子を見てからの方が良いかはどちらとも言えません。正直分かりません」と答えたら、Mさんは「そこは、タイミングやから、お前の営業センスにかかっているが、M商事のKと一日中、電話でやり取りしても無駄やろ。東京へ行ってMの上司のIさんを交えて、早く価格を含めた方向付けを決めとかないと取り返しのつかない事になつて、お前ひとり責任を被る羽目になるぞ。」と深刻な話になつて来たので、N君は食べるのを止めて、箸を置いて、「責任問題は、別としてそれでは、Mさんが言われるようにM商事に向き、話し合い、方向付けを決めて、現地に飛ぶのであれば、直ぐにでも準備しますが……」と答えると、

それに対し、「お前は俺が言つたから、それに同意して、直ぐにそうしようと言うが、それは、お前から提案して来ないといけない事と違うか？K部長が良く言っていることは、仕事は担当者が絵を描き、自分なりに情報を集めて、タイミングを見て、こうあるべしと提案して、上司、

関係者をどう動かすかを考えて行動する事やぞ。俺に言われたからやるようでは、受け身で駄目や」と厳しい口調でN君に注文をつけた。食事の雰囲気は少し気まぐらくなつてきたが、N君は「Mさん、そんなことは分かっていますよ。私はもう少し情報を集めて、提案しようと思つていました。今、Mさんが先回りして、そう言われたから、反論しても良かったんですが、Mさんの考えも間違つていないと今思つたので、同意したままで、お前から言わないといけないと言われるのは私にとっては、心外です」と反論した。Mさんはムカツとした表情で「おい、飯がまずくなるので、この位にして、昼から作戦を練つて、明日は無理として明後日に東京に向きM商事と話をつけに行こう」という事で、この話は終わり、別の話題に移つたが話は盛り上がり、三人は昼食を続けた。



私の言論

成人の日は、毎年小正月（十五日）に固定をといた記事を読んで、私も同じ思いになりました。知らぬが仏とはこの事か、何年か前のこと。一月十五日、今日は成人式ではありません、一月十八日です。是非のお越しを。へえつ、いつ変わったの？「あんた知ってたの」「知らんからついてきたんや」

三十三間堂で弓矢式、成人が晴れ着姿で的を目出して弓を放つ姿を毎年見に来ていたのです。趣旨はどうであれ、簡単に変更してしまうことに対して腹の虫が治まらなかった。若かりし頃（七〇才を過ぎていたけれど）思い出したのです。

昔は、徴兵検査を基準に、成人となったのです。二〇才になれば、男子は兵役が与えられ、甲乙丙種と區別され、覚悟して一人前の男子になったように自覚して生きてきたものです。

戦時中、女子はパーマでも掛けたら異国人・国賊のようにいわれ、オシヤレは焼きコテで波をつけてハイカラにしたのです。一月十五日（小正月）は、父親を中心にそろってお雑煮を食べたり、どんど焼き。その灰を持ち帰って軒根にまいて悪魔除け。今、そんなこと田舎でもやっているのかしら。古き良き小正月の伝

統が忘れられないのです。

成人の日は、やっぱり一月十五日に。これから成人してゆく曾孫たちのために、ゆれ動く成人の日は決定しないように。昭和から平成へ、よき事への前途を願って止みません。

おばあちゃんへ

お世話になりました。毎日ご飯を作って待ってくれてありがとう。

かなりのハードワークでしたが、おばあちゃんのおかげで、なんとか乗り越えることが出来ました。不規則な生活をさせてしまったに申し訳なく思っています。

くれぐれも古い食物は口にしないように「もつたいたい」という気持ちはわかります。多少もつたいたいと思っても処分するようにして下さいネ。ご飯代にもならない位の少額ですが納めて下さい。元気で長生きして下さい、又顔を見に来ます。ニコニコして迎えてくれるおばあちゃん。ほんとうにありがとうございます。お父さんへ

深夜に帰って来て、物音をさせてごめんなさい。街角まで見に来てくれていた姿を思い出して涙。やっぱり私のお父さん。ありがとう。夕香より

老いのたわごと

若いお母さんが赤ちゃんに優しく歌

うゆりかこの歌を「カナリアが歌う、よ、ねんねこよ」

子守唄を歌って軽くフトンをたたき乍ら寝かせている姿。今あるのだろうか。おばあちゃんから若い母へ、孫へと歌いつがれてきた童謡。

現在だったらきつと「ペチカ」「私たちの花」「待ちぼうけ」「雨降り」口について出る年配者もあるだろう。

息子が言う「赤胴鈴の助」の歌ばかりで母は僕を寝かせることに一生懸命だったと。

友とある歌謡ショーに、満席、晴れやかな舞台に見とれ、次々と唄いこなしてゆく歌手に吸い込まれ、しばし茫然。でも一言も心の中に刻みこまれないのは何故だろうか。

口ずさむことも出来なかった。心の中では何かが渦をまき「誰か故郷を想わざる、花つむ野辺に日は落ちて、みんなで肩をくみ乍ら、歌を唄った帰り道」と口ずさむとスラスラと。まぶたには、ふるさとの山や川、竹馬の友の顔が浮かぶ。

今、子供達が歌う環境は、どうだろう。俳優の小沢昭一さんは、童謡を老人がふるさとへ帰れる歌「老謡」と言って居られた。少子化時代だからこそ、大人が「老謡」を大いに歌って童たちにその情感が伝えていけたらと思う。

俳句

土田 裕

独り居の玻璃戸ごしなる春の雪すみれ咲く普通いし宝塚
手術終へ視界良好山笑ふ
春禽の声に膨らみ楠大樹
雨の中なにかが動く芽吹き山

懇親会のお知らせ

四月五日（日）十一時から

場所 芥川商協会館

（JR高槻駅より徒歩三分。芥川商店街・コンビニの北側五〇メートル）

会費 二千円

テーマ「歩くことでボケ防止」
生きている間は元気でいたい。一番おそれているのはボケルことです。

参加予定者は、山歩きが好きで六甲
全山縦走を連続十六回されてる麻田さん、精神科医の伊藤さん、いつも元気な眞糶さんとお友達、いのちの電話相談を始められた明石さん、マラソン好きな鶴飼さんなど多士済々。
珍味な肴と美味しい酒などを用意して頂きます。

参加希望の方は、梵まで連絡をお願いします。